



## 馬耳東風

ワクワクしながら雨上がりの台地の畑の畦を歩く。大雨の後はずがしがしく眼が届き易い。表土が流出して遺跡片が露出するのだ。近くに旧石器や縄文遺跡がある。土器片や石器に出会う。もちろん焼け石も出る。鋳による耕作の時代と違って大型トラクターが用いられると遺跡片はどうしても破碎されて小さくなる。拾い集めて水に浸し、きれいに洗って眺めると縄文人が使っていたであろう姿が眼に浮かんでくる。感性を持って縄文の芸術品としての捉え方に魅力を感じる人は多い。破片で発見される文様は、持ちやすく心地よくフィットする。どんな人が型付けをしたのだろうか。縄文の文様の何と豊かなことか。

開発行為の場所が指定箇所だと予備調査が組まれる。ユンボが投入され、試験掘削が静かに丁寧に行われる。発掘対象物の存在の有無が確認され、対象物が出ると本格的な発掘が義務付けされる。道路や建築物建設では思いがけない事例にも遭遇する。各地の郷土歴史館には地域先住民の遺物が大切に保管展示されている。訪ね歩くと、石器とともに修復復元された見事な文様が浮き出た縄文容器が多い。手からすべり落ちないように文様を幾何学的に刻み込み、まるでスリッパ止めがしてあるようだ。

縄文時代は1万年以上の年月を自然と共生した時代だ。最近発見され国指定となった青森県の大平山元遺跡おおひらやまもと いせきの時代は、炭素年代測定で1万6,500年前の縄文草創期のものだと分かった。四大文明の一つは中国だとされ、日本はその恩恵下にあったと思われるが、これに匹敵しそうだ。まだまだ未解明なことが多い。

縄文時代でその美を誇るものはなんといっても火焰型土器や土偶である。発掘量の多い約5千年前の縄文中期の遺跡は、川が近くを流れるやや小高いところが多い。

日当たりと見通しが良く、排水が良く水に不便でないところが選ばれている。多くの地点で発見される加曾利式や勝坂式の土器は、縄文中期を代表するものである。縄文の語源は、モースが名付けた Cord marked pottery の縄紋に発し紋が文になったと言う。縄目の模様を巧みに構成した火焰型土器の低温焼成技法は眼を見張るものであり、文様に秘められた対象はいったい何なのか。あの岡本太郎を驚かせたそうだ。釣手が水陸を往来するへびのとぐるまきやイノシシやカエル、ニワトリを象形化しているようだ。火焰型は多雪地帯に符号するという。まさに炎の造形美だ。土器学習は地域の歴史体験教室として定着したところも多く、見事な土器作品が展示される。まさに「火の子宮」から生み出される炎の芸術が燃える心を育てている。古代人が燃える火に心を燃やした瞬間と共通のものだろう。土偶もまた、縄文のビーナスに代表される女性の成熟体型を誇張したものから、仮面で顔を隠したもの、合掌する祈りの土偶まで神秘の美だ。

縄文人の動物観（設楽博巳「人と動物の日本史1」吉川弘文館、2008）は、アニミズム animism の観念によって最も良く理解できるとし、動物は再生観の象徴として位置している。狩猟文土器や動物型土製品も豊穡を祈る狩猟儀礼のために用いられたとし、狩猟文化の多様で複雑化したものであったことをうかがわせ、高度化した複雑な狩猟民文化としての性格を帯びていたからだとしている。35万人を動員した上野の縄文展は、原点を求めた人々に、感性豊かに生まれた縄文芸術の今につながる熱血を再び沸かせてくれた。愛犬家が犬連れで参拝する東京の犬の神様・武蔵御嶽神社へ、縄文作家から「縄文阿吽大口真神像」じゅうもん あうん おおぐち まがみぞうが奉納され、大地と野生・土と炎の躍動を感じさせると評判である。感じよう！令和最初の輝く新年に「今を生きる」魂を！（柏）